

朝を ひらく

永田 円了
真国寺住職



職業として何か技能をもっている人をスペシャリストと呼ぶ。時間とエネルギーをかけてその道を究めた人たちである。では、果たしてこの人たちが人生という舞台でもスペシャリストになりえるのだろうか。

「ちょっと待った、もっと歌うように弦を弾いてくれませんか」。指揮者・小澤征爾さんがNHK交響楽団員に語りかける。鼻歌でも何でも、歌が生まれてくるときはそこに何か人生の喜びがある。楽器もその喜びをもって弾いてほしい、と促しているのである。

スペシャリスト

楽器を譜面通りに、ひたすら正確に弾くことのできる音楽のスペシャリストたち、しかしもし奏でる音楽に人生の喜びが盛り込まれないなら、人生舞台のスペシャリストにはなりえないのではないか。

一方「男はつらいよ」の寅さん、いい年をして定職にも就かず、無教養でわがままで、勝手に家を出てはまた帰ってくる男。大人としての成熟度が低い「幼児」のような愚かで厄介な

おじさんに、私たち日本人は理屈抜きに愛着を感じる。愚かであるが故に感じる「情の世界」。日本人が忘れつつあるものへの郷愁、私たちの心の奥底にある「優しさ」、きわめて人間的な感情が刺激されるのである。

大衆に迎合せず、アウトロー的な生き方をしながらも、人の幸せを誰よりも願っている寅さん。そして何よりも自身の生き方に自信と喜びをもって行動する姿に、私は人生のスペシャリストを見る。

「あ、それは私の妻と子供たちだ。彼らこそ人生のスペシャリストだ」

先日の私のAhaーエンパワメント講座に参加された方の

受講直後のコメントだった。子供服を扱う自営業のMさん、自身は大衆に迎合しなければ商売は成り立たない現実をしっかりと生きつつ、妻や子供たちの夢をしっかりとサポートする。これは一つ間違えると、「だれのお陰で……」となってもおかしくない、にもかかわらず、Mさんは優しい。

素晴らしいことは、現実の世界を生きる役割、理想をもって夢を生きる役割、この双方がお互いを理解し、家族の中でコラボしている姿である。これを私は「人生のスペシャリスト・家族版」と呼びたい。

一見愚かにも見える自由奔放な寅さん、世間の風潮に迎合せず、夢を追う家族を温かく受け入れサポートするMさんの優しさ、人生のスペシャリストになるためには、何も特殊な技術はいらない。

人生舞台の名優たち